

まちテク

土沢商店街の小さな日常の展示
2013年9月～10月
大村理文・小野嵩拓哉

まちテク ぶちギャラリー



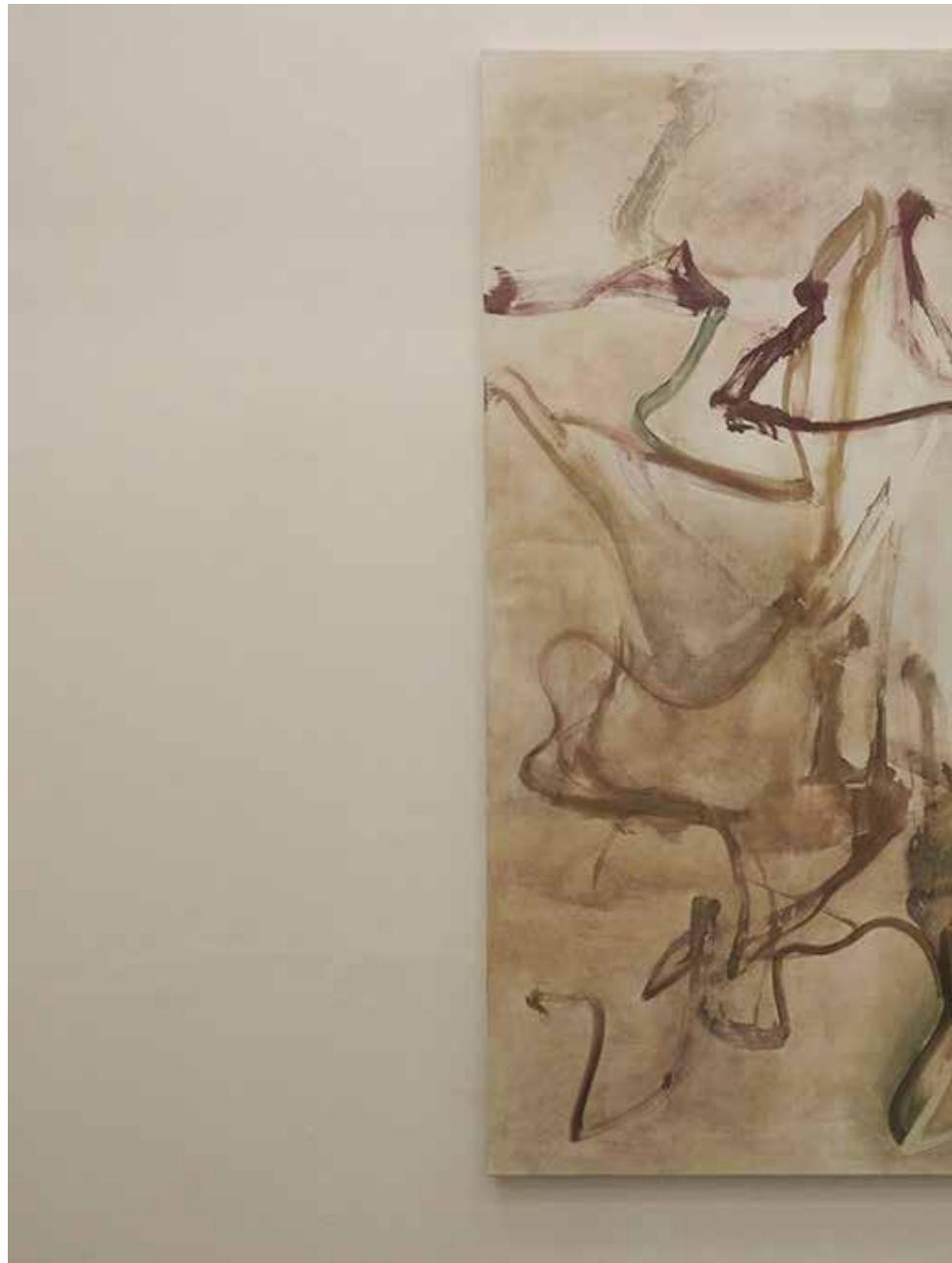
「まちテクぶちギャラリー」 #1
2013年9月10月の展示
小野嵩拓哉・大村理文
花巻市東和町土沢商店街 17 号所

企画 toncacci atelier
花巻市東和町田瀬 14-120
代表 菅沼緑
roqu@me.com
<http://www.arttsuchizawa.com/>
<http://machikado.urdr.weblife.me/>
展示希望の方は上記 e-mail アドレスまでご連絡ください。



多田理容店の入り口に置かれた小野嵩拓哉の作品写真





Untitled 2011年 油彩 194×162cm 小野嵩拓哉

まちかど美術館が始まる前の2003年と2004年の2回、「道路の社会実験」というものが「土沢まちづくり会社」の手で行われていました。このまちの商店街に、歩道を作るしたら、どんな形にしようか、というテーマで、このただでさえ狭い道路を、縦に半分に切って、仮設の歩道をしつらえ、そこをカンバスに見立てて、何人かのデザイナーの方にお願いをして、さまざまな歩道のイメージを自由に描いてもらい、試作をしたのです。

歩道に萬鉄五郎の絵を埋め込んだもの、アクリルで水たまりのような形を作って、傘をさした女の子が写っているなど、かつて、路というものが子どもの遊び場で会ったように、「遊びの歩道」と題されたちよっぴり芸術風な歩道が現れて、非日常というか、非現実的な空間が現れて2週間ほど人々は非現実を楽しんだということがありました。

そうした出来事からこのまちの人々は、非日常的なお祭り騒ぎが大好きで、少々変わったものでも、気前よく受け入れて消化してしまう、非常に前向きな志向の持ち主が大勢いる明るいまちだ、というイメージがひろがり、それが「アートのまち」という方向へ繋がったとしても、何ら不思議ではないと思います。

当然のように「アート@つちざわ〈土沢〉」へと繋がり「アート&クラフト土澤マーケット」に発展してゆきました。

しかし、特定の期間だけの盛り上がりも、その期間が過ぎれば元の木阿弥。いやむしろ、その反動か、と思うくらいシャッターは降りてしまうし、空き地も目立つようになっています。非日常的な出来事も大変におもしろいし、耳目も集めるのですが、小さな出来事の日常が積み重なることで、生まれる文化はさらに大事なことです。

あまり目立たなくとも振り返ると、積み重なってあらこんなになっていた。ということはジワジワと人の心に染み込むのではないかと思います。例えばハガキ大のサイズの写真で作品を紹介する日常はどうだろうか、と考えるに至りました。

ハガキ大というのでは、人の眼に触れているのかさえも、定かではない展示ですが、あまり肩肘を張ってやるのではなく、ゆったりと続けることが大切なのではないかと考えています。

ハガキ大の写真を屋外に貼って展示したところで、興味のない人にとっては空気みたいなものにしか写らないでしょう。

それでも、誰か興味のある人の眼に触れたときに、こういうこともあるのかと、感じてもらえ何らかのヒントにだってなるかもしれません。

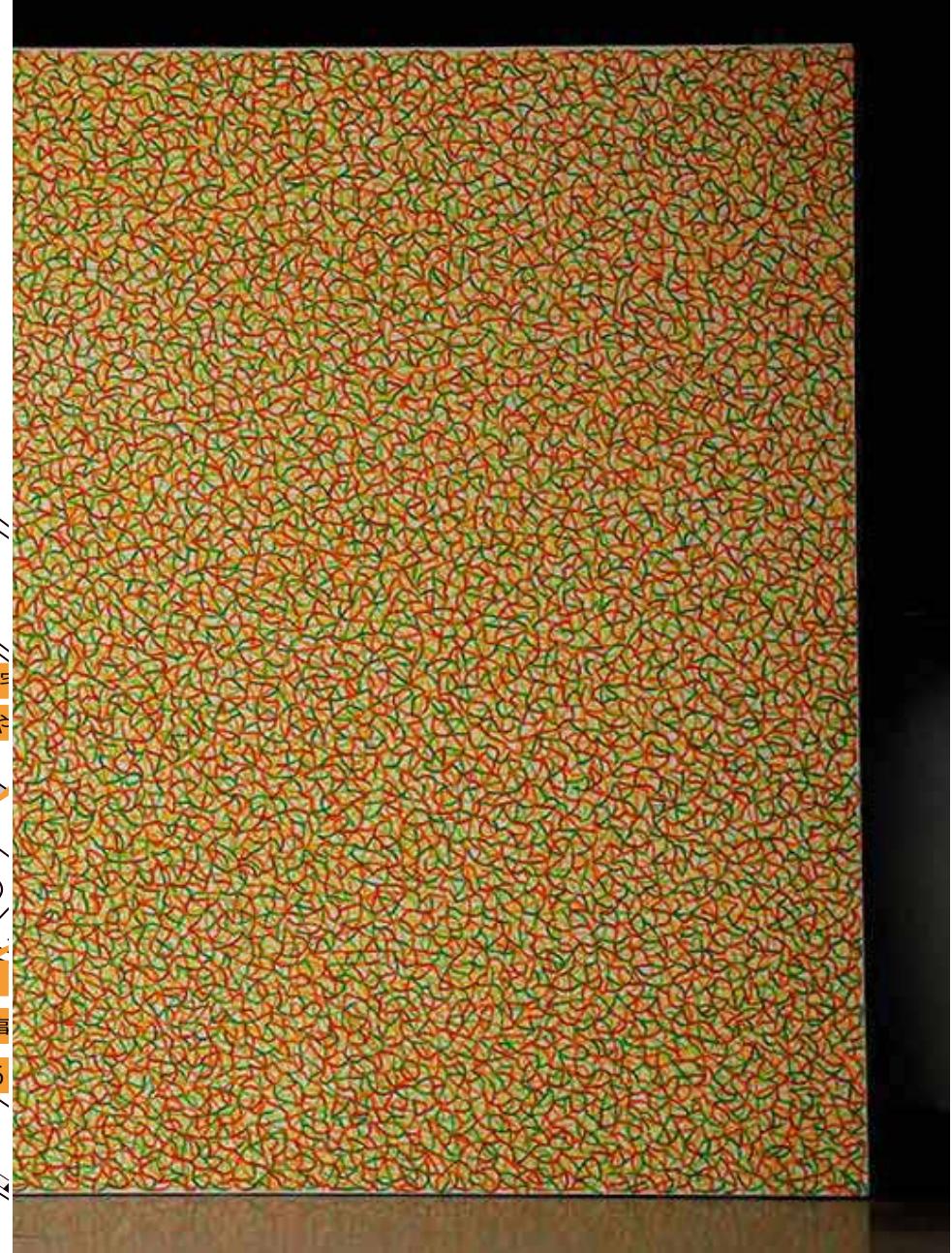
どんなに小さなことでも、人に与える影響というものは、のちに大きな力になります。夏の日の、焼けた地面を忙しく歩き回る蟻の姿に感じたことが、おとぎ話になることもあるわけです。

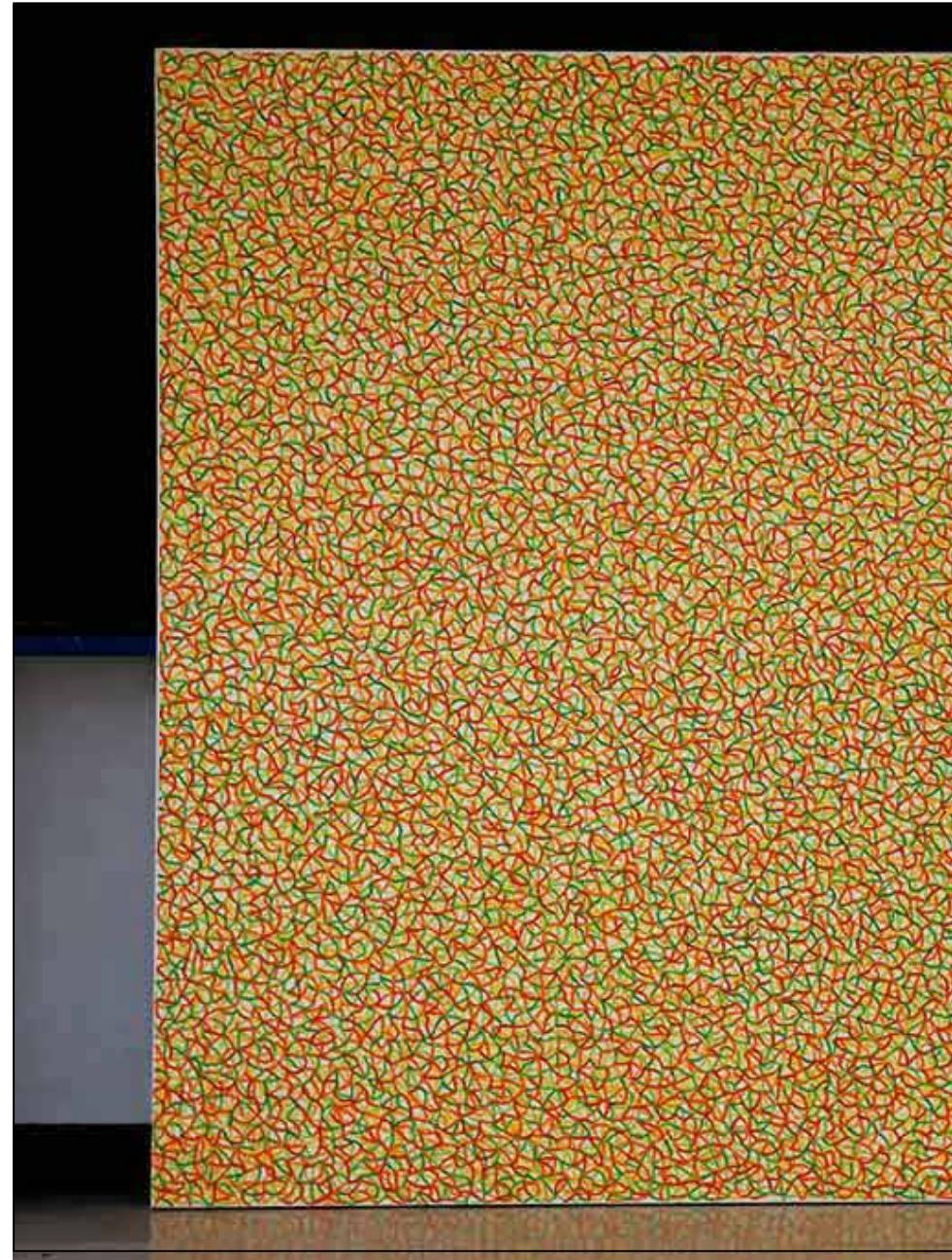
ほんのちょっとの間、立ち止まってこれを見て何かを感じてくれる人と、それに賛同して、写真を提供してくれる人のために、これをともに始めようと考えました。

この試みが、営みとして定着したとすれば、本当の意味でアートのまちとして息づくことができるのではないかでしょうか。

作品の紹介はこのまちテクぶちギャラリーをホームページ上に掲載することと、この小冊子も部数は少ないかもしれませんのが作り続けるつもりです。

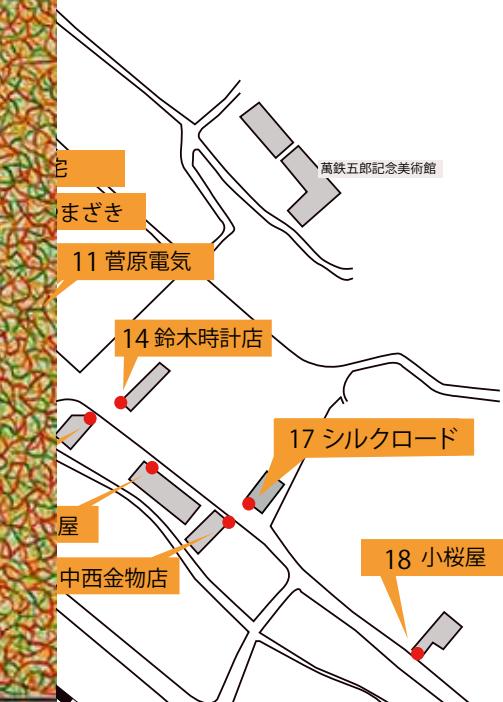
さらに、小冊子はPDF化してホームページ上で配布することもできるでしょう。これもできる、あれも可能だと手を広げすぎては、あごを出すことも考えられるので、少し引き締めながらスロースタートでいくことがこの計画の日常のはずです。





ポストカード大の作品写真を3枚ずつアクリルのケースに入れて商店街の壁に展示する。写真を提供してもらえば誰でも参加できます。

いわば青空ギャラリー。歩けば棒ならぬ作品に当たる。作品を観ようすれば町を歩く。作品に出会い、人とすれ違い、まちに加わる青空ギャラリー。





⑨ 大村理文 やまざき



⑩ 小野寺拓哉 岡田新聞店



⑪ 小野寺拓哉 菅原電気店



⑫ 大村理文 小田島宅



「つちざわのねこ」2009年 (116.7 x 91 cm) キャンバス・アクリル絵の具 大村理文



「白い猫」2005年(31.8 x 41 cm)キャンバス、アクリル絵の具 大村理文

「ポアンカレの予想」という数学の難問を証明した数学者の話をテレビで観ました。過去百年間多くの数学者が挑んでも成し遂げ得なかった「宇宙の形」に迫る問題を誰も考えもしなかった方法とすさまじいまでの集中力を持って解答を得たのだろう、と噂をされているばかりですが、誰もその過程を見た人はいません。人との関わりを断ち切って何年も孤独な環境に置いて始めてなし得たのです。

難問だからこそ、それに挑戦し、糸口を見つけようとする。それこそが欲望欲なのでしょう。元をただせば欲望。人にできないことを自分がしてみせようとする。表現への飽くなき欲が基本なのかもしれないと思いました。葛飾北斎が80の時に、あと10年寿命をもらえば、更にいい絵が描けるだろう。と言わしめた生きてなにかをしよう、という欲望。欲望は人を生きさせる。

芸術というのもしかすると単純な「欲」だったのかもしれません。今あるこれよりもっといい作品を作りたい、作れるかもしれない、作らなければならないという欲望が人を動かし、突き動かし進めるのでしょう。

だからといってその欲望が正しい方向を向ける力になり、実際に良いものになるのかはまた別の問題であると思います。とにかく前へだからもしかすると、後ろへ向いてしまっているかもしれないけれど進む。ここは違うどこか別の場所へ進み移動をすることが生きさせる力なのかもしれません。その手段が目的に合っているかはまた別の問題で、100人100様の動機と欲や方向に観る側の欲望もまた貪欲に動かす。こればかりは理屈じゃない。



⑬ 大村理文 吾助堂



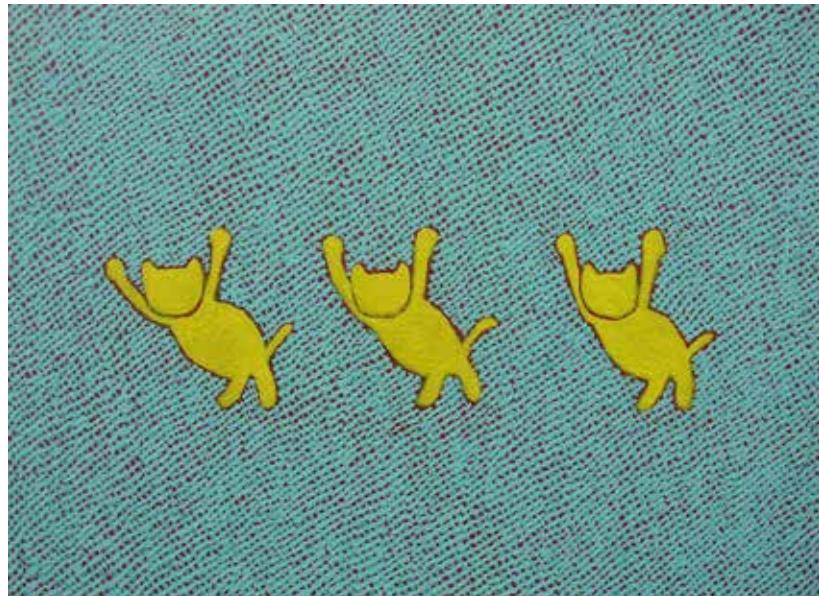
⑭ 大村理文 鈴木時計店



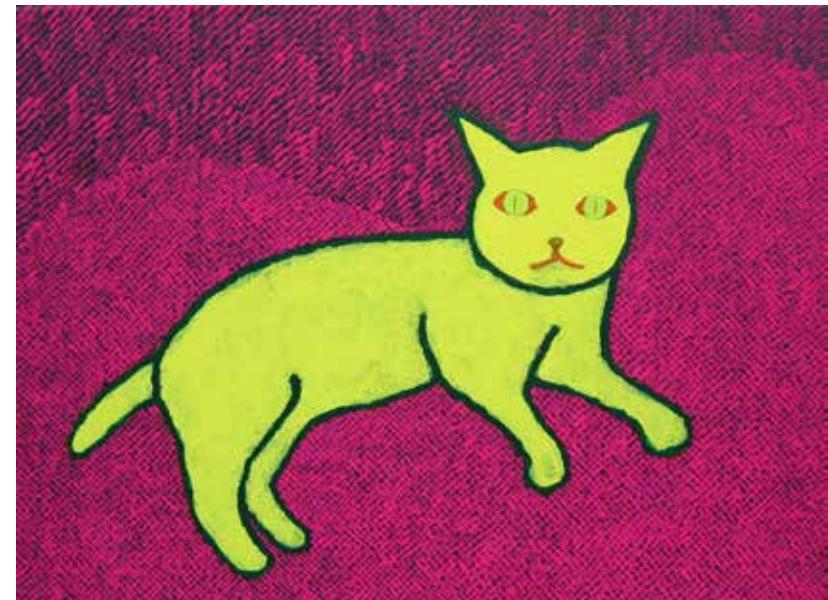
⑮ 小野嵩拓哉 手仕事屋



⑯ 大村理文 小桜屋



「並列」2007年(24.2 x 33.3cm)キャンバス、アクリル 大村理文



「green sun」2009年(24.2 x 33.3cm)キャンバス、アクリル絵 大村理文

表現の欲

この二人の作品を観て当たり前のことではあるけれど、絵やものを作る動機にはやっぱりいろいろあるもんだとつくづく思われました。

絵描きが100人いればその動機には100種類あるだろうということは、頭では分かっていてもこうしてみていると、やっぱりそれはおもしろいなと思うのです。

大村君の場合、絵を記号にしてしまおうという気持ちが働いているような気がします。

おそらく最初からそういうつもりで絵を描き始めたのではないだろうけれど、普通の絵を描いているだけでは飽き足らなくなつてなにかの拍子に、そうした思いが湧いてきても少しも不思議ではないバックグラウンドが端々に現れているように見えるし、現代という時代もそれを求めるような面もあると思うからです。

猫が好きなようで、いろいろな角度からいろんな猫を書いているけれど、右の絵のように結構素直に書いているかと思えば、それこそ記号的に猫の姿を書いていることが多く、上の絵は同じ格好をした3匹の猫が並んでまるでラインダンスでもしているかのようで、意味もなく形を合わせることのおもしろさをどこかで楽しんでいるような気もします。

大村君は説明のための絵から始まり、自分自身が描くのではなく対象から迫られるように、形まで決められてしまって絵を描く。

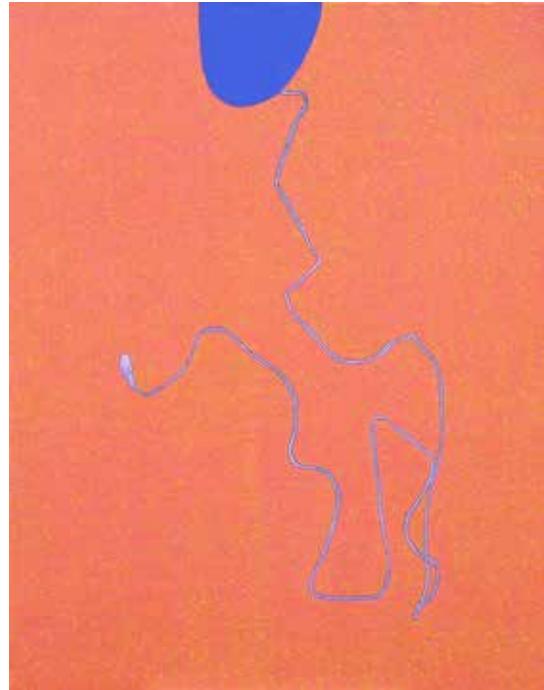
小野嵩君は自分の意思よりも迷路をなぞる指が形象を勝手に作ってしまうもうひとりの自分がいる。この表現が適切かは分かりませんが、二人ともに絵を描くという主体があたかも別にいるというような、現代という物事の表層を身ぐるみ剥がしてしまうような、過酷な時代の津波の中で必死に松の木にしがみついているような時代の申し子の一人ひとりなのかもしれません。

時代の荒波の中で翻弄されるのは、なにも彼らだけではなく今生きている全ての人々に共通した状態です。

表現というものが、芸術として成立するためには表に現れる実景と背景という二重の構造の中で、その表と裏をどうやってくつけるかという意識が働いてこそ有効になるような気がします。

大村君は「自分の人生の中で苦しいこととか悩んでいることを、直接表しても絵にはならないような気がする」と言っていましたが、私にもそれは実感として染みついた感覚があります。

村上春樹は「芸術はメタファーだ」と書いていましたが、おそらくそのことだと思うのです。二重の構造を持っていて、その隙間に表現が潜み現れるのではないかでしょうか。二重構造だからそれだけでいいというわけでもなく、もっと別の表現たらしめる理由はあるのでしょうか。私にはまだまだ分かりません。



「connect」2010年 (116.7 x 91cm) キャンバス、アクリル
絵の具

もちろん時代の圧力は若者だけではない、同時代に生きる人々の全てに関わっていることではありますけれど。

小野嵩君は子どもの頃には迷路の絵を描くことが好きで、それを描いていれば気分が落ち着いていられたというようなことを、よく話していました。

小学校の頃にはノートの端っこに迷路を描き始めると止まらなくなり、そうしている時間は自分と正面から向かうことができ、存在することの理由すらその時間から立ちのぼってくるようだった、というようなことも話していました。

つまり、絵は形象ではなく行為だったのでしよう。いや、過去形ではなく現在もそうなのかも知れません。

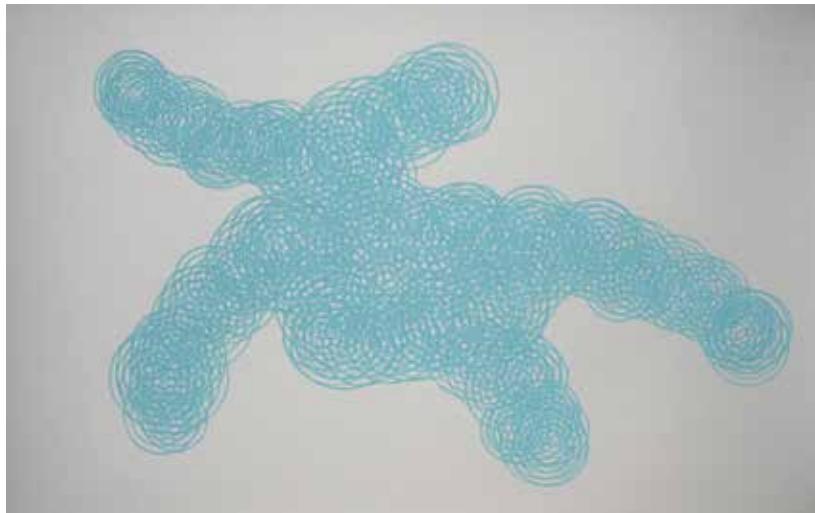
画面の形象などどうでも良くて、自分がそれに没頭できる入り口として迷路やキャンバスがあって、それらと向き合いながら営んでいる自分に立ち返る手段として絵の世界にのめり込んでいる小野嵩君だと思うのです。

くねくねと折れ曲がる迷路であればそこには色とりどりの華やかな色彩はあまり縁がないのですが、次の段階では色が数を増してきて明るい画面を構成したりしていました。

それが最近では幻覚のように立ち現れる雲の現象をキャンバスにとどめようとしているかのように太く大きい線がキャンバスに一杯の躍動する筆の跡を残しています。



「つちざわのねこ」2009年 (116.7 x 91cm) キャンバス、アクリル絵具 大村理文



「輪」2012年(45 x 70cm)ケント紙、水性マーカー(1) 大村理文

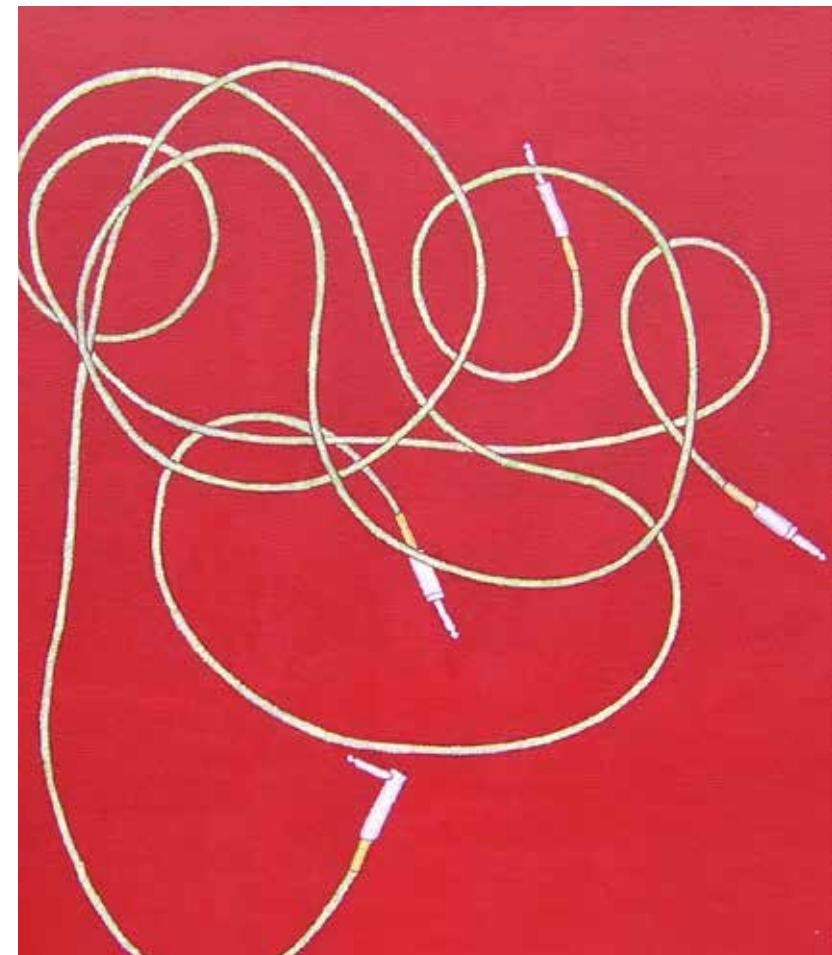
それはたぶん、「絵を描く」ということを意識的におとしめているような気もします。

絵を描くということなんてそれほどたいしたことではないよ、というような具合にです。当たっているか分かりませんけれど、このページの上の「輪」のシリーズにしてもコンパスで描いた円を重ねて絵を作っていますが、マチエールだとか色の具合を云々するわけではなく、ただひたすらに丸を書いて重ねるだけです。そうやって記号を絵にして、普通では絵にならないものを絵にしてしまおうという企みもあるのではないでしょうか。

そうした企みが絵画という芸術として成立するための条件がどういう形でこうした絵の裏側に横たわっているのか分かりませんが、大村君が最初に絵を描きたいと思った時には、既に大学に入っていて、先生から具体的な説明を求められたときに絵で描いて説明しようと思った時が、最初だというような話をしていました。

既に大学生になって、芸術的な表現を学び、自分のものにしようと思ったときに、必要に迫られて絵を描いた。それが、以後絵を描き続ける直接的な動機になって現在に至っている。ということだと思うのですが、そうした動機の背景にゴッホだとかピカソといった先人の築いた道があるわけではなく、全くの自分の事情から始まるという傾向こそ現代という時代を端的に表している傾向で、それはいいとかそうでないとかいう範疇ではなくて、一人ひとりの思いや動機が形になりやすい柔軟な時代のひとつの側面の中で私たちが生きている証拠だと思います。

右のページの細いコードが絡み合いながら幌勝手いる絵にしても、コードの曲線を自分が作るのではなく、手からバッと離したときに机の上でコードが勝手に作った線を描きたかったんだと大村君は言います。自分は絵を描くけれども、その形は自分が決めるのではなくて対象である「もの」そのものが決めることだというわけでしょうか。



「sleeping wire 2」2010年(53 x 45.5cm)キャンバス、アクリル 大村理文

それはつまり、絵や芸術をありがたく作らせてもらうのではなく、既にそこにあるものそのものの方が現実であり、現実こそが社会を表しているというようなマルセル・デュシャンのレディーメイドから始まっている哲学が定着しているという証しなのではないでしょうか。

今回展示をお願いした小野嵩君にしても30代の若者として果敢に絵に取り組んでいるのですが、やはり小野嵩君にしても作品に取りかかる姿勢にはこの時代の背景をずっしりと肩に食い込ませているというか、それから逃げることができないでいる若者のひとりだと思いながらみています。